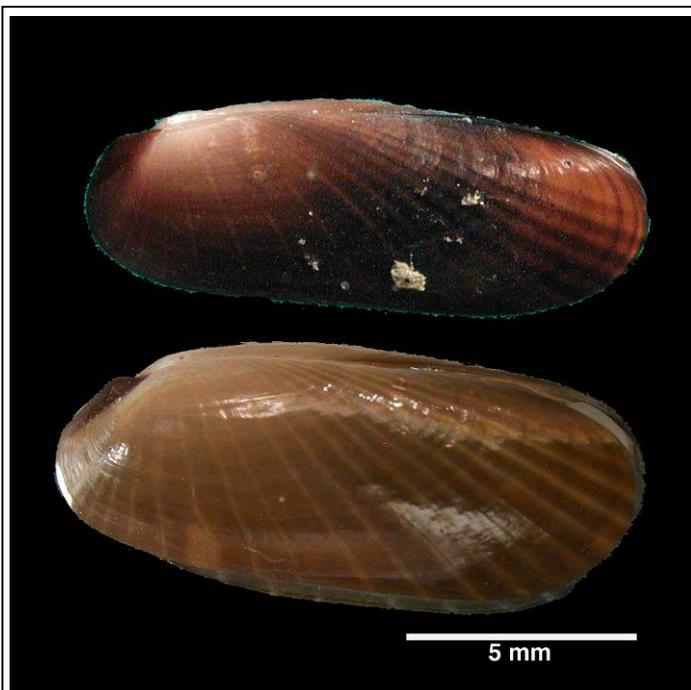


アサヒキヌタレガイ *Solemya japonica* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本種はキヌタレガイ *Solemya pusilla* Gould (愛知県ランク NT) の近似種であるが、さらに外洋水の影響の強い潮下帯のアマモ場周辺の砂泥底に生息することが多い。キヌタレガイが生息する三河湾湾口部の砂泥底からは死殻さえ採集されなかった(木村, 1996; 2000)。しかし、浜名湖、三重県側の伊勢湾口部、英虞湾では生貝が継続的に確認されており、近年三河湾湾口部で操業する底引き網の漁層中より少数の死後間もない死殻が採集されたので、愛知県内にも生息していると判断された。その後のドレッジ調査、渥美外海で操業する底引き網漁業の漁層調査でも生貝は採集されていないが、比較的多くの死殻が採集された。絶滅の可能性が高い種であると評価された。



渥美半島伊良湖沖(トロール漁), 2016年8月9日, 木村昭一採集

【形態】

殻長 20 mm。殻は円筒形で厚い殻皮におおわれ非常に薄く、石灰分が少なく軽く脆い。キヌタレガイと近似するが、殻質はやや厚く、殻の色彩は濃く淡黄褐色の放射肋が明瞭で数が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、近年三河湾湾口部で新鮮な死殻が採集されたにすぎない。本種の殻には石灰分が少なく、死後比較的早期に分解するので、おそらく付近に生息域が存在すると判断された。

【世界および国内の分布】

日本、中国大陸に分布し、国内では北海道から九州の内湾から湾口部の潮間帯から水深 20 m 程度の砂泥底に生息する(木村, 2012)。キヌタレガイより外洋水の影響の強い海域を生息環境とする場合が多い(木村, 2012)。現在干潟で生きた個体が確認されることは非常に少ない。浜名湖や瀬戸内海では潮間帯のアマモ場で生きた個体が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾から湾口部の潮間帯から水深 20 m 程度のアマモ場周辺の砂泥底に生息する。鰓には硫化水素を用いて有機物を合成する化学合成細菌が共生している。その他の生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】の項参照。本種は潮通しの良い良好なアマモ場周辺に生息するので、アマモ場の消失は無論、干潟の埋め立て、無酸素水塊の発生、水質汚濁の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 木村昭一, 2012. アサヒキヌタレガイ, p.106.in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

【関連文献】

- 秀島佑典・木村妙子・木村昭一・佐藤達也, 2014. 生浦湾における貝類群集と底質環境の季節変動. Venus, 72(1-4): 139.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)